平成30年度土砂災害防止　作文　【 土木部長賞 】

「土砂災害について考えたこと」

高松市立国分寺中学校　三年　鳥井口　友樹　さん

土砂災害。それは、すさまじい破壊力を持つ土砂が、一瞬にして多くの人命や住宅などの財産を奪ってしまう恐ろしい災害です。

二〇一八年七月、西日本を記録的な豪雨が襲いました。死者は二〇〇人以上となり、平成に入って最悪の豪雨だと言われています。その豪雨により、広島では降り続いた雨による土砂崩れや土石流が住宅街に流れ込み、被害が拡大しました。

今回は、この災害を通して感じたこと、体験したことを伝えたいと思います。それはたった一つ、「助け合うことの大切さ」です。僕は今回の災害時に、早く復興することを願っていました。しかし、ここで僕は思いました。「願っているだけではだめだ」と。被災した町では復興のためのボランティア活動が多く行われています。僕はそこへ行こうと決心しました。

八月十四日、僕は広島県呉市で行われているボランティア活動に参加しました。朝早くに行ったが、そこには既にたくさんの人が来ていました。この日は高温注意情報が出ていてとても厳しい暑さでしたが、多くの人が参加していました。その中には、小学生くらいの小さな人から御年配の方まで、幅広い年齢層の人が参加していました。僕と同じ思いの人が人がたくさんいると知って嬉しくなり、がんばろうという気持ちが強くなりました。そして、一チーム十二人に分かれて活動することになりました。作業内容は、まず、土砂に埋まった家の周りを掘ること、次に、掘った土砂を土納袋に入れること、最後に、その土納袋を指定された場所に運ぶことです。作業はチームの人と役割分担して行いました。十分ごとに休憩がもらえるとのことで「案外楽かな」と思っていましたが、土砂は掘っても掘ってもなくならず、土納袋はとても重くて、非常に大変な作業でした。チームの人とのチームワークも必要で、話したことのない人とコミュニケーションをとりながら作業を行うことは、僕にとって厳しいものでした。

休憩中、作業場の近くに住んでいる被災者の方が話を聞かせてくださいました。

「掘っても掘っても家の一番下が出てこなかった。今は少しは元に戻っているけどね。最初に下が見えたときは本当に嬉しかったな。」と幸せそうに話してくださいました。僕はそれを聞いて、もっとがんばって早く被災者の人を喜ばせたいと思いました。

作業をしているうちに、一時間の昼休憩になりました。その間に、僕は作業場より少し上がったところにある、土砂災害の被害が大きかった場所に行きました。山の上からどのルートをたどって土砂が流れてきたかが分かるくらい、木がきれいになぎ倒されていました。跡形もなくなくなっていましたが、そこには家が四軒もあったそうです。家があった場所には大量の土砂しかありませんでした。自分よりも大きな岩が道を塞ぎ、屋根の上に泥だらけの車が持ち上げられていました。その光景はこの災害がどれだけひどいものだったかということを物語っていました。どれだけの人が辛い気持ちになったのかと思うと、とても心が苦しくなりました。そこで僕は改めて一刻も早く復興を果たしてほしいと思いました。

昼休憩の後、運ばれてくる土納袋を積み上げて山にしていく作業を担当しました。午前中に作った土納袋がどんどん運ばれてくるので、それを持ち上げて積んでいきます。昼からは気温もぐんぐん上昇し、午前中よりとても大変でした。土を掘るよりは楽かなと思っていましたが、途中からじわじわ効いてきて、腕がだるくなりました。でも、サボる訳にはいかないので、必死にがんばりました。そのうちに、チームの人たちとも打ち解け、チーム内でも笑いが起きるようになりました。その結果、みんなの意気が合い始め、効率よく作業を行うこともできました。

その作業を一時間程続けていると時間がきました。とても疲れてクタクタになりました。一人では辛くなる作業でも、みんなで協力して取り組むことで、乗り切ることができました。少しでも復興につながる活動ができて、充実感でいっぱいになりました。

ボランティアのみんなは、声をかけ合い、励まし合い、助け合っていました。僕が休憩をしているときには「大丈夫か？」「影でしっかり休んどけよ。」と優しく声をかけてくれました。人は互いに助け合っていくのです。助け合うことで何事も乗り越えることができます。自分の身の回りでたとえどんな災害が起きようと、周りにいる人と声をかけ合えば、必ず復興することができると思います。

天災はいつ起こるか分かりません。ですが、普段の生活から、互いに協力することを意識することで、どんな困難にも負けない助け合う世の中を作っていけると信じています。